



Title	尊厳ある縮退に関する理論的準備と展望
Author(s)	渥美, 公秀; 石塚, 裕子
Citation	未来共創. 2023, 10, p. 163-191
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尊厳ある縮退に関する理論的準備と展望

渥美 公秀・石塚 裕子

要旨

本稿は、研究プロジェクト「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生」の成果をもとに、尊厳ある縮退のための理論的準備と実践的な展望を述べたものである。まず、尊厳ある縮退の背景として人口減少社会を取り巻く議論と集落の再生・創生の事例を概説した上で、尊厳ある縮退の研究・実践に向けて、縮退や尊厳といった基本的概念について紹介した。次に、尊厳ある縮退研究・実践を推進するために検討すべき論点として、対象地域の拡張、地域診断、集落が消滅するプロセスと時間、尊厳ある縮退が依拠するモデル、実践現場におけるツールの開発について、検討し理論的準備とした。最後に、尊厳ある縮退に寄り添うアクションリサーチの課題を展望し、民藝をヒントとした民衆的アプローチの必要性を確認した。

目次

1. 尊厳ある縮退の背景
 - 1-1 人口減少社会
 - 1-2 集落の再生と創生
2. 尊厳ある縮退
 - 2-1 尊厳ある「縮退」
 - 2-2 「尊厳ある」縮退
3. 尊厳ある縮退の論点
 - 3-1 対象地域の拡張
 - 3-2 地域診断
 - 3-3 集落が消滅するプロセスと時間
 - 3-4 尊厳ある縮退が依拠するモデル
 - 3-5 実践現場におけるツールの開発
4. 尊厳ある縮退に寄り添うアクションリサーチの課題

キーワード

尊厳ある縮退
人口減少社会
尊厳
縮退
アクションリサーチ
民衆的アプローチ

はじめに

本稿は、筆者らが実施した研究プロジェクト「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生」¹の成果から理論的議論を紹介し、今後の研究・実践に向けた展望を拓こうとするものである。研究プロジェクトでは、事例研究や政策的実践を計画していたが、プロジェクトの実施期間がコロナ禍による各種の制限と重なり、現場での研究・実践が十分には行えなかつた。そこでプロジェクト終了後も、関心のある方々に参画してもらつて「尊厳ある縮退同好会」²を結成して、実践事例や理論的展開に関する議論をオンラインで継続している。本稿では、理論面での成果を紹介することとし、事例研究や現場での実践については、少しほ実施したものを踏まえるとしても、今後のさらなる研究や実践に向けた指針として展望しておきたい。

具体的には、人口減少社会や集落の再生・創生の背景を整理し(第1章)、概念としての縮退、尊厳について先行研究を繙きながら検討する(第2章)。その上で、尊厳ある縮退を進めるに当たつて検討されるべき論点を紹介する(第3章)。最後に、尊厳ある縮退に基づくアクションリサーチの論点を整理する(第4章)。

1. 尊厳ある縮退の背景

1-1 人口減少社会

我が国の人口は、2008年に1億2808万4千人でピークを迎え、それ以降、死亡数が出生数を定常的に上回るようになった。また、世帯の小規模化、未婚化・晚婚化により、2015年におけるもっとも多い世帯は「単独世帯」となつてゐる。将来推計人口では、今から約50年後の2065年には総人口8807万7千人、65歳以上人口割合は38.4%となつた後、人口割合の変動は鈍化すると予測されている。そのような中、人口減少、単身世帯中心、約4割を65歳以上が占める縮退時代のグランドデザインが求められている。

中山間地に存在する従来の地域コミュニティ（以下、集落といふ）では、土地を守るつながり、生業のつながり、伝統行事等のつながり、宗教的なつな

がりなど文化基盤によって、コミュニティを創り維持してきた。しかし、人口流出、少子高齢化などが進行して久しく、今や、限界集落、消滅可能性の高い集落などと名指しされる集落も多い。こうした集落の持続可能性を目指し、過疎対策としての様々な集落活性化事業は展開されているが、一方で集落を縮小していく、そして、究極的には閉じていく方向での議論は極めて少なく、その実践的な事例にも乏しい。

一方、人口減少、少子高齢化は都市部も例外ではない。都市部では、さらに、無縁社会などという言葉に象徴されるように人間関係の希薄化が進行し、都市を縮小して行くための方略は未だ提案段階に過ぎない。実際、賢い撤退戦略として、市民の自発的意思によりながら経済活動と居住を複数の都市拠点に時間をかけて誘導する必要があるという指摘がある。ともすれば、市民の自発的意思を十分に汲み取ることなく、“強引な縮退”に墮すことがあることは、災害復興の事例などから明らかである。また最近では、東京一極集中から脱却すると同時に地方都市における集住を掲げ、農山村から地方都市部への移住を推進する「多極集住論」を巡る議論もあるが、農山村の実情と合わないため、結局、ミニ東京をあちらこちらに作るだけに終わるという指摘(小田切 2023)もある。

1-2 集落の再生と創生

集落の再生とは、住民の自発的意思によりながら集落を持続可能な形で存続することである。一方、集落の創生とは、住民の自発的意思によりながら集落を閉じて集落として別様の生活を目指すことである。すなわち、両者が異なるのは、一旦集落を閉じるかどうかである。言い換えれば、集落再生も集落創生も集落の消滅とは違って、集落は存続し、そこに人が存在する。

集落を観察し、描写する際に、生活基盤維持を越えた活性化を唱えたり、住民の苦難と悲惨さを強調したりすることは慎むべきであろう（畠本 2010）。むしろ、植田（2016）が指摘するように、存続の岐路に立つと、集落の範囲、領域、多様な関係が可視化されるという点に注目し、それが人々にどう体験されているかという原点に立ち戻って、集落とは何かというところへと議論が進む。植田が結論するように、集落の存続には、通常、空間的継承（場所

的普遍性)が注目されるが、時間的継承(時間的普遍性)を視野に入れることを考えたい。そうすれば、縮退の方向を見据えても、集落の消滅はありえず、多くの場合は、同じ場所で集落の持続可能性を考えていく再生が想定される。仮に、一旦集落を閉じる創生であっても、同じ場所で集落を再開すること(例えば、集落の第2幕)に縛られなければ、別の場所との間で2地点居住化を推進するとか、集団移転後の場所で伝統行事を再開するといった時間的な継承ができることを考えていくことになる。

実際、集落の再生に関しては、(同じ場所で)集落の持続可能性を達成していった事例は枚挙に暇がない(例えば、岡田・平塚・杉万・河原 2010)。一方、集落の創生は、災害によって一旦集落を閉じて移転せざるをえなかった事例として福島を注視し続ける必要があるし、中越地震(2004年)によって集落ごと移転して新たな土地で再スタートした小千谷市十二平地区のような事例(福留 2012)を追うことも忘れてはなるまい。また、平成の合併前に、村史を編纂したり、記念碑を建てたりして、一旦行政上の単位で閉じて再スタートした事例などが数多く残されている。

なお、集落の人口を個人の集積としてだけで捉える必要はない。まず、これから時代を展望すれば、AIなどを入れておくべきであろうし、そもそも、集落を考えるときには先祖や未来の子ども達を想定するのだから、いわゆる人口だけでは不十分だという議論(山崎 2020)もあってよい。ここでは、AIまでは踏み込まず人口の考え方そのものに問題提起を行っている活動人口(藤井 2018)に言及しておこう。

藤井(2018)は、従来の人口の考え方では、活動量が多い人も少ない人も、夜間人口でみると等しく「1」というカウントになると問題を提起する。そこで、活動量が多い人は、同じ地域内であってもダブルカウントする。換言すれば、まず人口の単位を離散的に考えず連続量とする。次に、活動量をそれに対応させるというわけである。ここで、活動量が衰えると活動人口が減ると単純に考えてはいけないだろう。例えば、24時間介護の必要な障害者は、多様な人々が周囲で、濃淡交えた活動を展開することを必要とする(渡辺 2003)。そこに住んでいることではなく、そこでの活動量をもとに人口を考えていく。政策においては、活動人口といった理論的指標をいかに測定可能な

指標とするかという点に議論が集まるだろう。

2. 尊厳ある縮退

2-1 尊厳ある「縮退」

集落の限界、衰退、存亡といった議論はこれまで広く注目を集めてきた。例えば、過疎高齢化が進行した限界集落が消滅の危機に瀕しているとの指摘（大野 2005）があれば、高齢化によって消滅した集落はないという議論（山下 2012）が起こる。まず、限界集落論（大野 2005）は、「65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超える、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落」を巡る議論である。提唱者の大野は危機を喚起することを目的としたのかもしれないが、現状では、特定の集落が限界なのか限界でないのかといった表層的な言説が見られる。山下（2012）は、高齢化による機能不全によって消滅した集落などないと指摘したが、そうした集落の有無ばかりに注目するのではなく、そこに住む人々にとってどのような問題として経験されているのかが把握されなければならない。畠本（2010）が指摘するように、伝統芸能・文化の衰退、山村の原風景の喪失、自然環境の貧困化などを論拠に、限界集落は「地域を活性化するために再生しなくてはならない」という主張が生み出されるのならば、そこには飛躍がある「と考えざるをえない。注目すべきは、地域住民一人一人のくらしであって、伝統、文化、原風景、環境といった抽象化されたものではないからである。

また、消滅する地域があるとして自治体ごとのデータを沿えたレポート（増田 2014）が出れば、即座に、それは政策の罠だと反論（山下 2014）が出る。確かに、増田による報告は、消滅する地域を名指してセンセーションを巻き起こしたが、それは罠だという指摘（山下 2014）は、的を射たものである。集落は元気であって消滅などしない、ましてや、中央からの選択（と集中）によって消滅させられたりなどしないという山下の議論はその通りである。

無論、限界集落論や地域消滅論に対する代案もいくつか示されている。例えば、世帯間の地域住み分け（山下 2012）や二地点居住を含めた多様性を認め合う共生（山下 2014）である。また、その方法として例示されたT型集落点検

(徳野・柏尾 2014)といった手法が紹介されたりもしている。

ここでは、限界・消滅論争とでも呼べるような少々センセーショナルな議論から一步離れ、客観的なデータを見ておこう。まず、金木 (2003) によれば、昭和20年代から60年代にかけた地形図の比較から抽出できる消滅集落の数は2922であり、これが、事実として消滅した集落の数となる。さらに金木・桜井 (2006) は、消滅集落が消滅する理由については積雪が最も多く、また戸数が14を下回ると消滅を引き起こす可能性が強まることを明らかにした。

また、集落の消滅過程について、藤尾・土井・安東・小山 (2014) らは、先行研究と自身らの事例研究を総括して、学校の閉鎖、国勢調査上の人口が0、集落での越冬不可、山の仕事がなくなり集落に通う世帯の激減、夏に通う世帯の激減、そして墓地の移転に至ることがある程度一般的な流れであることを類型化している。尊厳ある縮退研究会でも、兵庫県上郡町の山上集落などで、確かに同じ流れが生じている事例を確認してきた。

また、理論的には、「積極的な撤退」(林・齋藤・江原 2010) を未来に向けた選択的な撤退として提言する議論もある。「積極的な撤退」の時間スケールとしては30年から50年とされ、空間スケールは1つの市町村ということであるので、ここまで議論してきた集落よりは広い。ただ、条件が厳しい地域では、「平場への集落集団移転による生活と共同体の立て直し」「尊厳ある最期(むらおさめ)」が提示される。尊厳ある最期とはいえ、下手をすると「何もせず、このまま消滅させるべき」などとなりかねないので、何十年という長期にわたる多大なサポートが必要であると注意がなされている。他にも、尊厳をもって村を閉じようとする事例も紹介され始めているが、こうした研究は「主流になっていないのが現状」(田中 2021) である。

人口動態に注目して、特定の年に何が起こるかを想定して年表に整理したり(河合 2017)、我が国は縮小するという事実を衝撃だとして伝えたり(NHKスペシャル取材班 2017) している。これらは、週刊誌やテレビ番組を経て、ほとんどが新書版で発刊されており、多くの人々の注目を集めていることが分かる。

尊厳ある縮退研究では、こうしたセンセーショナルとも言える論戦から多様な論点を学びつつ、以下の2点を提示する。まず第1に、尊厳ある縮退研

究では、集落の存続あるいは消滅のいずれかを推進するものではない。そもそも、集落の存続か消滅かといった二項対立的な立場はとらない。

縮退は、英訳すると shrink となるが、尊厳ある縮退研究では、shrinking という現在分詞を充て、縮退が動的な概念であることを強調している。この点については、矢守 (2020) が精緻な議論を展開しているので参考されたい。ここでは、集落がいわばどちらの方向を向いて考えていくかという点に対応する概念だと紹介するに留める。すなわち、従来のように集落が活性化し、発展していくという価値観をもとに現状に対応するのではなく、集落は沈静化し、充実していくという価値観（を醸成してそれ）をもとに現状を再考していくということを指している。確かに、縮退には、極値として集落の消滅が理論的には設定されえるが、関連分野で議論されてきた論点（安楽死・尊厳死にまつわる議論）などを参考しながら、留意点を挙げる。

第2に、尊厳ある縮退研究では、集落の縮退は、行政が計画するのではなく、また、経済論理（のみ）によって推進されるのではなく、集落住民とその集落に関係する人々が相互に対話を通じて進めていくものとする³。このことは、従来の過疎論・限界集落論が、そこに住む人々にとってどのような問題として経験されているのかが把握されていないという批判（植田 2016）や、「村の人々がどう思っているかが大切だ」という中学生の声（かつやま子どもの村中学校子どもの村アカデミー 2018）を承けている。確かに、集落の衰退であるから、集落住民による選択や決定がもっとも重視されるのは当然であろうが、ここに集落に関係する人々との対話を含めたのは、自己決定論の陥落一選択肢の限定された中で決定を強いる欺瞞（安藤 2019）といった理論的な問題や、AI など科学技術への対応（山崎 2020）といった実践的な問題が関係するからである。

ところで、集落の縮退は、安楽死・尊厳死を巡る議論を参照することでより深く理解できる。無論、ここで死が不可避かつ不可逆的な極点であることをもって、集落の縮退も集落の消滅を意図していると考えるのは全くの誤解である。そうではなく、昨今の安楽死や尊厳死を巡る議論の中に、生こそを重視する立場があり、その点から、縮退という概念を深化させる契機があるという指摘である。

安楽死や尊厳死のような死に到らせる行為は、積極的な安楽死、医師帮助自殺、延命治療の手控えと中断という具合に分類される（安藤 2020）。日本では、積極的な安楽死も医師帮助自殺も合法化されておらず、医師がそのような行為を行えば殺人罪に問われる。延命治療の手控え・中断は、法制度としては成立していないが、終末期の医療現場では一つの選択肢となっており、これを尊厳死と呼んだりする。安藤（2020）が指摘するとおり、昨今では、尊厳死という言葉を使うこともなく、さらには、終末期とも言えない患者にも治療の手控えを適用するという事件（2019年公立福井病院の人工透析中止問題）やALS患者の嘱託殺人事件（2019年）が発生したことは由々しきことである。また、積極的な安楽死や医師帮助自殺を欧米のように合法化しようという動きもあり、NHKスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」において安楽死が合法化されているスイスで安楽死を遂げていく姿が放映され賛否両論を巻き起こした。特に、日本自立生活センター（JCIL）による批判——障害や難病を抱えて生きる人たちの生の尊厳を否定し、また、今実際に「死にたい」と「生きたい」という気持ちの間で悩んでいる当事者や家族に対して、生きる方向ではなく死ぬ方向へと背中を押してしまうと言う強烈なメッセージ性をもっている——は、極めて重大な指摘であろう。安楽や尊厳といった響きのよい言葉⁴を安易に持ち込む、笑顔で、そして、よかれと思って人々を不可逆の過程に追い込んでいくことへの戒めとすべき指摘である。

こうした現状から何を学べるだろうか。結局、安楽死・尊厳死は、「悪い生」の代わりに「よい死」を（こんな状態で＜生かされる＞ぐらいであれば、＜死んだ方がよい＞）という考えに基づいているという点である。集落の問題に戻れば、集落が限界だ、地域の消滅だと「悪い生」を煽り、リスク管理だの自己決定だのといった言葉を振りかざして、それが無理なら「よい死」へと誘う、いわば集落の安楽死・尊厳死を推奨するというのでは、人々の安楽死・尊厳死と同じ轍を踏むことになる。ここでこそJCILの批判を想起すべきである。安藤（2020）が指摘しているように、我々にとって大事なことは、「悪い生」の反対は決して「よい死」ではなく、「よい生」であるはずだということである。

確かに、生が終わるようには、集落も終わるのかもしれない。しかし、その時のために何をするかということは、決して生をあきらめるということでは

ない。発展しかあり得ない、活性化しなければならないなどと大仰に外部から支援と称した施策を押しつけるのではなく、縮退という方向を認めて、集落住民と集落に関係する人々が対話を重ねることが、現在の生の充足感を取り戻すことへと繋がっていくのではないだろうか。

尊厳ある「縮退」研究では、豊かに縮小し、意義深く退いていくという意味での縮退を考える。集落に対しては、「発展しかありえない」、「活性化しなければならない」などと大仰に外部から支援と称した施策を押しつけるのではなく、縮退という方向の存在を認めて、集落住民と集落に関係する人々が対話を重ねることが、現在の生の充足感を取り戻すことへと繋がるのだという姿勢をとる。

2-2 「尊厳ある」縮退

集落での生活に何ら敬意が払われず、限界が来たから消滅するというのでは、いかにも住民や関係者の尊厳が踏みにじられていると直感できるだろう。一方、集落にとって尊厳とは何かということは自明ではない。尊厳という言葉は、1877年の新聞記事に現れたのが最も古い（加藤 2017）とのことであり、明治の近代化後に日本語に定着したものだという。同様の経緯をたどった他の多くの概念のように、日常会話においても使われ、様々な分野において議論もされる⁵が、必ずしもその内容について定説となる拠り所がなく、曖昧さを残している。

哲学においては、加藤（2017）の整理によれば、まず1785年に提出されたカントの定言命法——みずからの人格と他のすべての人格のうちに存在する人間性を、いつでも、同時に目的として使用しなければならず、いかなる場合にもたんに手段として使用してはならない（カント 2012）——が引き合いに出される。そして、ショーペンハウエルによる批判——尊厳の毀損は議論できるが、尊厳の尊重といつても具体的な内実が一義的に決まらない——が言及され、結局、尊厳といえば、対象の無条件の保護、安易な手段・道具的扱いの拒否を生むので、思考の停止を導く実効性のない概念かもしれないという疑惑が呈される。またカントの議論は、人間を前提としていることが批判されたりもする。例えば、相手を人間ではないと認識すれば、相手の尊厳

は無視される(例えば、ホロコースト)からである。では、人間を前提とすれば、そこに存在することだけで尊厳を維持することになるのだろうか。アウシュヴィッツの極限状況を考えれば、単に生き延びること以上の何らかの質的規程が施された生を認めたい。それが尊厳なのかもしれない。こうして議論は延々と続くことになる。尊厳ある縮退研究では、このような哲学(史)的議論に深く入り込むことは避け、1点だけ批判を行ってより実効性のある概念へと拡張したい。すなわち、これまでの尊厳に関する議論は、個人に帰属する概念であったということである。

尊厳に関する研究は、加藤(2017)など重厚な成果を参考しつつも、ここでは、ローゼン(2021)による尊厳概念の4分類にそって整理しておこう。第1に、フランス革命以前の階級社会における考え方として「地位としての尊厳」が挙げられる。第2に、カントを代表とする「本質としての尊厳」という思想が現れる。第3に、シラーが参照され、人の振る舞いを想定した「態度としての尊厳」が分類される。そして、こうした尊厳概念がそれぞれ主体に関する概念であることから、客体の姿勢を問い合わせ、第4の分類として「敬意」が抽出される。ローゼン(2021)が重視するのは「敬意」である。ローゼンは、「私たちには敬意を表すようなやり方で行為する義務がある」(p.182)とし、「他者の人間性を敬わなければ、私たちは実際に自分の中の人間性をも掘り崩してしまうのである」(p.204)と結論している。ここで、「敬意」は、主体に属する地位や本質や態度ではなく、そういう主体に接したときの客体の姿勢である。言い換えれば、ローゼンは、尊厳という概念を関係とともににある概念へと彌琢しているのである。

実は、生命倫理では、尊厳とは存在に関する集合概念であった。小松(1996)は、脳死を契機とした臓器移植を批判的に議論する中で、死が集合的な承認によって成立していることを示したが、その後も一貫してその立場から、尊厳死や人間の尊厳という概念を巡って議論してきた(小松 2012; 2013)。そして、尊厳とは、人間の中に宿る何らかの実体や状態それ自体ではなく、関係性を通じて出来する事柄に他ならない(小松 2012)と結論している。

尊厳ある縮退研究における尊厳という概念も、集落そのものに何らかの実態や状態として宿るのではなく、集落の住民間で、また、集落に関わる人々

を通じて立ち現れる集合的な概念として捉える。その上で、集落を（都市の）発展のための手段としてしか捉えないとか、さらには、集落の住民がどのように考えているかを捉えずに活性化などと言い出したり、集落の基盤を整備するといって集落の物的な面しか注意を払わない施策などは大いに批判していく。そもそも集落のくらしを人口という指標に還元したり、何らかの機能を外部から設定し、その衰えをもって限界だ消滅だなどとしたりする議論は、論外という立場をとる。尊厳ある縮退研究における尊厳とは、集落の住民と集落に関係する人々が対話を通して、互いの人生の価値を認め合うことができるなどを指している。

社会が縮小していく際に想定される危機は、確かに、人口が減少したり、さまざまな社会資源が枯渇したりすることのように思われる。したがって、人口増加のための方略、社会資源の投入といったことが模索される。これが今まで集落の活性化を目指した様々な対策であり施策であった。その結果、集落支援の人材が募られ、中山間地の集落と都市部との交流人口の増加（最近ではさらに関係人口の確保）などが展開されてきた。その背景には、やはり成長、開発という暗黙の前提が伏在していた。しかし、本研究の提案する縮退という概念のもとで、あくまで尊厳を維持しながら、コミュニティを見据えるとき、そこに想定しておくべき危機は、縮退という否定的な現実を受け入れられることによってもたらされる主体の問題である。すなわち、コミュニティが「縮退」するということ自体ではなく、むしろそれに向き合う「主体」における受容が問題となる。そこで、社会が縮退していくことについての集合的「受容」が肝心であり、それに至るまでに生じる様々な病的兆候に対処していくことが重要である。死の受容に関する議論や、ホスピスとターミナルケアにおける実践を参考することになる（次章）。

3. 尊厳ある縮退の論点

本章では、著者らによる尊厳ある縮退研究プロジェクトを通して明らかになった事柄のうち、今後の展開にとって有用であると思われる論点について紹介しておく。2章で整理したように、尊厳ある縮退は、よい死（＝計画的な

早期撤退)ではなく、「よい生」を全うすることである。しかし注意が必要なのは、よい生とは、外部圧力による「活性化」ではないということである。集落が「よい生」を全うし、その結果として消滅が尊厳ある縮退として集合的に「受容」されるプロセスとはいかなるものであるのか、そのプロセスを支援(ケア)することの必要性について考察するための論点を列挙する。各論点は、尊厳ある縮退という文脈においては相互に強く関連しているが、それぞれ独立に検討するに値するものであるとも考えている。

3-1 対象地域の拡張

国土交通省・総務省(2016)によれば過疎地域等条件不利地域は1042市町村あり、全市町村の約6割を占めている。これらの市町村以外で、自治体を字別でみた場合に人口減少率や高齢化率など過疎地域と同様の条件である地区を「地域内過疎地」とした。図1に示すとおり、地域内過疎地は過疎地域と都市地域の狭間に位置する。このような地区は、都市側からのアプローチとしては、迷惑施設の立地やスプロール開発などを抑制するための土地利用規制は行われてきたが、既存集落整備に活用できる制度は限られておりあまり注目されてこなかった。しかし、過疎地域よりも都市圏に隣接し、都市との対流が図りやすく、国が言う「コンパクト・プラス・ネットワーク」(国土交通省

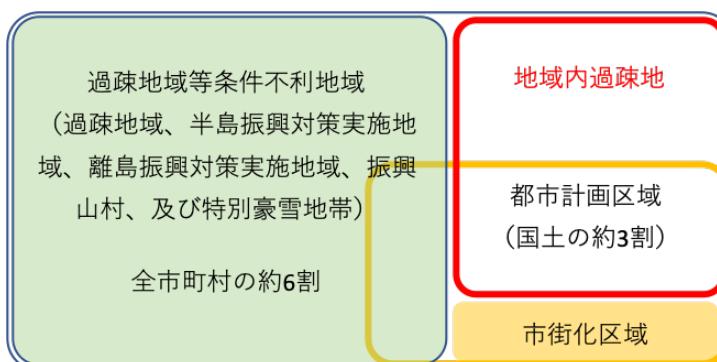


図1 地域内過疎地

2015) を体現しやすい可能性を持つ。一方で過疎地域と同様に深刻な高齢化、人口減少が進行していることから、地域内過疎地は、過疎地対策の長年の経験を踏まえて、都市政策との連携が可能であり、尊厳ある縮退を検討する適地である。

3-2 地域診断

兵庫県上郡町赤松地区15集落を対象に表3に示す6つの指標を用いて集落診断を行った。その結果、3つのつながり（生業・行事・土地を守る）が確認され、先行研究（一ノ瀬他 2009）での3つの縮小（生産空間、生活空間、組織）と合わせて縮退の枠組みを図2のように設定した。住民のつながり、結びつきは日々の活動量と比例すると考え、3つのつながりの矢印は活動量を示している。生産空間は生業と里山管理など土地を守る活動で支えられているといえるだろう。そして生活空間は神事をはじめとする地域行事と、清掃活動に代表される土地を守る活動で支えられている。組織は地域行事や生業が活発であればあるほど、組織が形成されたり、維持されたりするという関係を持つ。

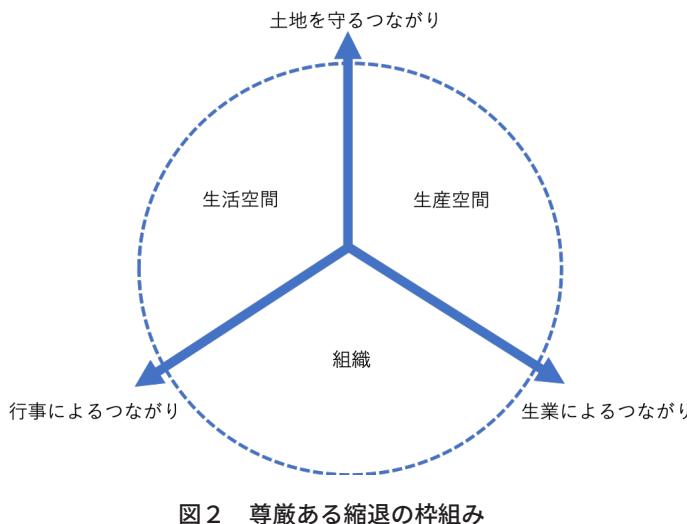
3つのつながりの活動量が減少すれば、おのずと空間、組織は縮小され円が小さくなる。3つのつながりの活動量を市民が自発的に考え、熟議しながら戦略的に減らしたり増やしたりコントロールしながら、生活空間、生産空間、組織が縮小していくプロセスが尊厳ある縮退であると考える。例えば、赤松地区では、3園区の統合のシンボルであった小学校が2012年に閉校、閉園となった。学校の閉校は生活空間に大きな変化を及ぼすが、赤松地区でも閉校にともない、様々な行事で学校に集まるという人の流れ、住民の動きに大きな変化を及ぼしたという（2020.03.07 公民館職員）。市民が熟議しながら戦略的に活動を減らしたり、活動の場を移したりして生活空間を縮小するプロセスを経ずに、合理性の論理だけで小学校を閉校させてしまうことは尊厳ある縮退ではないといえる。また、自治会などの活動が減少し組織が縮小しているのに、活性化という大義名分のもと、行政施策の枠組みにあわせて新たな地域活動を促すことは、強引に行事によるつながりの軸を伸ばそうとする行為であり、尊厳ある縮退を阻むものであるといえる。一方で埼玉県秩父市吉田太田部檜尾集落では、長年世話をになった段々畑を花の咲く山に戻す活動

を経て、生産空間を縮小させ、集落が美しく閉じていく記録が映画化された（NHK 2020）。この記録は尊厳ある縮退の一つの姿を示す。

尊厳ある縮退では、3つのつながり（プロセス）と3つの縮小（結果）のバランスが重要であり、外発的に縮小したり、拡大させたりせずに、市民が自発的に3つのつながりについて考える時間と場が必要なのである。

表1 集落診断指標

顔あわせ・地域の宝・結びつき・外部ネットワーク・安全・基礎	
指標	主な内容
顔あわせ	自治会活動、地域組織活動、地域行事、生業
結びつき	伝統行事、宗教行事、その他大切にしていること
地域の宝	歴史文化資源、自然環境、景観など
つながり	交流人口、外部組織とのネットワークなど
安全	災害経験、危険個所、防災活動など
基礎	人口、世帯数、高齢化率、子どもの数など



3-3 集落が消滅するプロセスと時間

研究プロジェクトで取り組んだ上郡町赤松地区の黒石集落は居住者1名、市原集落は0名となっている。人口減少、転出による集落の自然縮退プロセスは先行研究(藤尾ら 2014)により図3のようなモデルが報告されている。本モデルに当てはめると、両集落共に2008年頃に定住者が数人まで減少した。しかし、2019年時点では自治会が維持され、通い農者が数名、氏神の祭祀も行われている。黒石では同窓会として黒石会を発足させ年1回の交流会が開催している。今後、両集落の地域活動が完全になくなるのは10～20年後ではないかと想定され、定住者がいなくなるという状況が顕在化してから約30年程度は、故郷を見届ける時空間が必要であるといえる。また、時間軸だけ

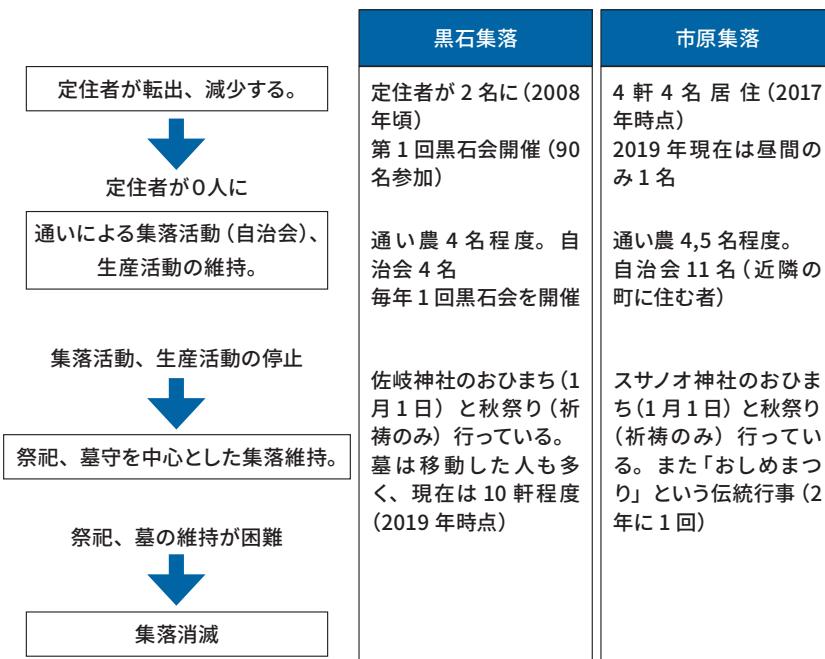


図3 自然縮退プロセス(*)と上郡町赤松地区の集落の現状

*藤尾潔・土井勉・安東直紀・小山真紀(2014年)「集落の消滅過程に関する考察—滋賀県多賀町保月集落の事例から—」,日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集,12巻より引用して加工

でみると不可逆的な運命のような流れとなるが、時間の質を問う「いかに過ごすか」という、もう一つの軸を加えることで縮退の幅が広がることを付け加えておく。

3-4 尊厳ある縮退が依拠するモデル

人とまち・むらの生のプロセスを図4のように対置した。人は誕生してから死に至るまで、育児、健康診断、介護という「ケア」を受け、死を迎える末期には「ホスピスケア」が選択できるようになった。一方、まち・むらは、戦後から現在に至るまで、国土開発、地域活性化と常に成長を求めてきた。しかし、定住人口が数人となり、まち・むらがいよいよ末期を迎える事態に対しても「ホスピスケア」のような「ケア」の施策は皆無である。

筆者らの研究プロジェクトでは、集落の縮退にホスピスケアにおける家族ケアの三大要素が援用することを試みた。三大要素とは「予期悲嘆のケア」、「死の受容への援助」、「死別後の悲嘆のケア」である。死を迎える患者を「まち・むら」に、家族を「住民」に、死を「縮退・消滅」に置き換えるのである。予期悲嘆のケアとは、まち・むらがやがて消滅を迎えることを予期して悲しむ住民に対して、「近々と思うとつらいですよね。悲しいですよね」と悲しみをしつかり受け入れることである。そして消滅の受容の援助では、まち・むらがだんだん住む人が少なくなってきた段階で、「つらいけれども、だんだん近づいてきている感じがします。今までにも心の準備をしてこられたと思いますが、本格的な準備が必要になってきつつあります。つらいですね」と悲しみを分かち合う。そして、消滅後の悲嘆のケアでは、まち・むらが消滅した後も、月に一度、場を設けて住民に来てもらい、専門家（外部者）が参加して、悲しみを分かち合うということになる。

本研究プロジェクトのモデル地区での集落会議の発話を分析すると、高齢の住民は集落の消滅を予期し、受容している傾向にある。そして「今」をよりよく暮らすことを目指している。一方で、消滅後については想像することが難しく、語られることも少なかった。また、先行研究（e.g., 徳野・柏尾 2014）では消滅の予期、受容を確認するためのツールが提案されてきたが、本研究では消滅の予期、受容に対する専門家の具体的な支援はあまり必要とされず、

消滅を予期し、受容している住民と共に、今をよりよい暮らすことに寄り添いつつ、「消滅後の悲嘆」へのケアを共に考えるプロセスが必要であると提案した。

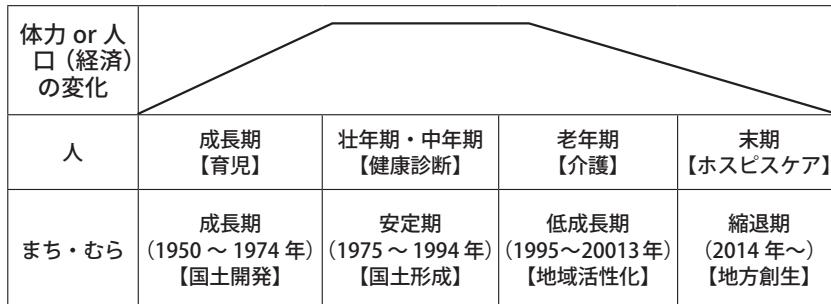


図4 人とまち・むらの生のプロセス

尊厳ある縮退の結果、コミュニティが消滅した場合、その住民がもつ悲嘆をいかにケアするかが、縮退の予期への悲嘆をケアすること以上に重要であることは、これまでのホスピス・ターミナルケアの研究・実践でも繰り返し指摘されてきた。それを念頭に、施策として実施する際に参考になる実践事例を整理した。まず、縮退のプロセスを大切にしていく事例があった。例えば、廃校が決まった中学校の閉校式を思い出深い場としていく取り組み（高知県四万十市）や、都市部で取り壊しの決まった集合住宅を指定管理する団体が取り壊しまでの日々を多様な住民の交流活動で支えている事例（兵庫県尼崎市）などがこちらに含まれる。次に、すでに縮退が完了したと想定して現在を充実していく事例があった。具体的には、すでにコミュニティがなくなっているとしたら、何を残しておきたいかと問い合わせ、住民が1つだけ持ち寄るという事例（高知県黒潮町で行われている「未来へのメモワール」）である。何を持ち寄ったかを議論することを通して、現在何を大切に生きているかということが改めて自覚され現在の生活（縮退後の悲嘆ある生活）のケアが行えるというものである。研究プロジェクトでは、これら悲嘆へのケアに関連すると思わ

れる2つの事例群に対応した施策——尊厳ある縮退までのプロセスを充実させることを目指す施策、および、尊厳ある縮退を終えたと想定した場面での活動を充実させることを目指す施策——を提案した。

3-5 実践現場におけるツールの開発

尊厳ある縮退は、集落の住民が（集落に関係のある人々を交えて）、集落について語り合うことが核となる。しかし、現場に出てみると、集落の活性化ならともかく、縮退について語り合うことは誰しも気が進まない。実際には、語り合わなければ始まらないという自覚は、その集落の住民にこそ宿っているだろう。しかし、話を切り出しにくい。だとすれば、何か話し合いがやりやすくなるツールがあればよいのではないだろうか。ここでは関連する事象などを参照しながら3つの提案を行う。

集落エンディングノート

昨今では、終活という言葉が聞かれる。もともと終活という言葉は、2009年8月から12月にかけ週刊朝日で連載された「現代終活事情」という全19回の連載による（木村・安藤 2018）。当時は、葬儀やお墓の準備が中心であったが、2014年あたりから、サクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジングといった言葉と結びつけて語られるようになり、人生最後の時期を充実して過ごすための活動という意味に変化したようである。そして、今では、人生最後の身だしなみとして「エンディングノート」など、終活の内容を事前に指示する書式を整えた本が売られるようになっている。

木村・安藤（2015）によれば、エンディングノートに取り組む高齢者の動機は「迷惑をかけたくない」、「物の整理や預金等財産の整理について取り組みやすく満足感を得られやすい」、「死や死の備えについて話をする機会がなくそれを強くはないものの望んでいる」とされている。木村・安藤（2018）は、終活について語ることと死について語ることは、自らが亡くなるという事実を想定する点では共通しながらも、現実に起こるかもしれない様々な問題・課題を考えることと、内心における問題・課題を考えることの違いを持っていると総括し、終活として自らの老いや死に関する様々な事柄に取り組むことは、

実際に何かをしているという実感、今生きている実感、そして亡くなった後も安心できるという満足感にもつながるとしている。実際、終活をしているその時に人は、死から、少なくとも死の不安からは、一時的に遠ざかっているのかもしれない。

地方経済総合研究所(2017)の調査によれば、「終活」という言葉の認知率は9割強あり、終活の実施を検討している人は7割あるという。中には、エンディングノートを作成している人々も多く見られた。実際に市販されているエンディングノートの頻出語の共起分析を行ったところ、木村・安藤(2015)が見いだしたエンディングノートの主な項目——「医療・介護の意思決定」「葬儀・墓の内容決定」「親しい者への伝言作成」「財産管理」「持ち物管理」「経歴作成」「連絡先作成」「相続内容決定・遺言作成」「自分史作成」——と対応した結果を得た。

これらの知見を尊厳ある縮退に応用することは一案ではなかろうか。具体的には、「集落のエンディングノート」を上記の項目を参照しつつ作成し、集落で対話をしながら書き込んでいく。この作業は、集落が消滅するからではなく、集落がいつか閉じる時期が来たとき、その時までを充実して過ごすために書いていくものである。

縮退すごろく

人生ゲームという盤上ゲームは多くの人々が体験したことがあるだろう。まちづくりの現場では、リアル人生ゲームと称して商店街の店舗を渡り歩くといった活動も行われているようである。このゲームは年々ヴァージョンを重ねているそうで、各コマのエピソードはその時代に合わせて変更されている。そして、現在、通常は、億万長者になることが成功であって、貧乏農場に行くことが失敗とされる。

尊厳ある縮退は、集落の消滅を意味しないから、最後に消滅は設定しない。しかし、集落をそのまま維持していく集落再生と、集落を時空間的に拡張して捉えていく集落創生をゴールとする。もちろん、成功も失敗もない。こういう盤上ゲーム「縮退すごろく」を制作し、集落の人々と一緒に楽しみながら縮退を考えていくというアイデアである。

なお、盤上ゲームの多くは、プレイヤーが相互に競い争うルールを設けている場合が多いが、中には、協力型と言われるプレイヤーが協力することで目標が達せられるようになっているもの（PANDEMICなど）もある。集落において、縮退に関する対話を喚起する意味では、競争的ルールと協力的ルールのいずれが適しているかは、現場での検証を経て考えられるべきであろう。

縮退ディレクター

集落創生を考える際には、集落を時空間的に拡張しているとはいえ、一旦集落を閉じる。先述したように集落の経緯を取りまとめ、記念碑を建立するといった事柄は行われてきた。こうした事柄を意義深いものとするために、儀礼を整えることが必要であろう。

ここで尊厳ある縮退は集落の消滅は想定しないことを改めて強調した上で、葬儀を参照する。佐久間（2019）は、葬儀には、いったん儀式の力で時間と空間を断ち切ってリセットし、そこから新たに時間と空間を創造して生きていくという意味づけができるとし、その役割として、社会への対応、遺体への対応、靈魂への対応、悲しみへの対応、様々な感情への対応という5つの役割を挙げている。また、葬祭業の重要性を述べる中で、1996年に発足した厚生労働省が認定する「葬祭ディレクター」という資格制度に触れている。「技能審査制度に合格することで認定されるこの資格は、葬祭業界で働く人にとって必要な知識や技能のレベルを審査し、より一層の知識・技能の向上を図ることと併せて、葬祭業に携わる人々の社会的地位の向上を図ることを目的としている。葬祭の相談から会場設営、そして、式典の運営などに関する詳細な知識と技能を測る。「遺族心理、宗教などの知識、遺族などから多方面の質問に応答できるか、司会能力、マナーなど、悲嘆の中にいる遺族への配慮も欠かせない要素となってくる」（p.151）。さらに、事前に対話の糸口を用意する（個人の思い出、個人の人柄や長所）、遺族はつじつまの合わない話、前回と違った話をすることがあるが、気にせず聞き流すといったケアという視点を大切にしているという。

集落の縮退について対話を続けてきた結果、同じ場所で別の集落として再出発するにしても、別の場所で伝統行事などを継続することを誓っても、一

一旦集落を閉じるという集落創生を選んだ場合、これまでの集落をどのように閉じていくかは、極めて重要な場面である。その際、葬祭の専門家のようにいわば縮退ディレクターといった専門家がいることは重要な実践課題ではなかろうか。集落を一旦閉じるということにおいて求められる経済的、対人的、情緒的配慮について十分な情報と配慮をもった人材の存在である。

もちろん、そういう人材はまだ存在しないが、例えば、過疎対策を担当する行政職員が、未だ大きな流れとしての活性化には抗えないとしても、縮退に関する知見を深め、集落創生においてどのような情報と配慮が必要になるかを身につけていくことは必要であろう。そのためのネットワークを構築することが3つめの提案である。

本節で紹介した縮退のツールは、現時点では、研究者を中心としたグループが、実践現場を特定せずにアイデアを出し、議論し、総合している段階のものである。これらが特定の現場を得て、現場の人々が発案者らとともに練り上げていくこと（共創していくこと）が次の段階である。実は、本特集に類似のツールが紹介されている（川端 2023）⁶。

4. 尊厳ある縮退に寄り添うアクションリサーチの課題

ここまで、筆者らの尊厳ある縮退研究プロジェクトから理論的基盤と成果の一端を紹介し、ある程度の実践的課題の整理を行ったが、当然ながら、住民、実務者、研究者等が実際に取り組まなければその実効性は確認できない。そこで本章では、尊厳ある縮退の渦中にある人々に直接出会い、寄り添い、よりよいと判断される事柄について実践を共にしていくアクションリサーチについて課題を整理する。ちなみに、尊厳ある縮退に寄り添うアクションリサーチでは、本特集で吉川（2023）が試論的に展開している「生態系」観察アプローチを必要とすることは論を俟たない。なぜなら人口減少社会に関する“気象予報士”からの情報が頼りになるものであれば、尊厳ある縮退に寄り添うアクションリサーチは常にそれを参照していくことになろうからである。

ところで、縮退や関連する限界・消滅といった言葉を現場に持ち込むときの障壁は極めて高い。「うすうす気づいているけれど、よそ者に言われたくない

い」「過疎は悪いのか？放っておいて欲しい」「そんなことより今の生活を大切にしたい」「こうなることはわかってたし誰のせいでもない」といった声が聞こえてくる。こうした反応を受けた上でさらに現場で尊厳ある縮退に取り組むには、足繁く通い、住民との関係を深めていくしかない。ただ、それでは個別事例に沈潜することはできても、社会に広く実装していくことは距離がある。そこで、せめて多様な事例に関する情報交換ができる場を設置しようということで、尊厳ある縮退に携わる実務者、具体的には地方自治体の担当職員、住民団体のメンバーなどから成るネットワーク組織「尊厳ある縮退同好会」を立ち上げた。現状では、兵庫県上郡町、奈良県十津川村、兵庫県朝来市、兵庫県神河町、兵庫県尼崎市、広島県坂町、高知県黒潮町、愛媛県西予市の人々や研究者（愛媛大学）を互いに紹介し合って参加を募り、研究と実践のネットワークを構築した（尊厳ある縮退研究会ホームページ内）。今後、「同好会」を拡充して尊厳ある縮退に関する情報を集約し、技法を開発し、ともに尊厳ある縮退を実現していくことが目標となる。

最後に、尊厳ある縮退をテーマとしたアクションリサーチを展開する場合に注意しておくべき姿勢について触れておきたい。具体的には、石塚・今井（2022）で展開してきた民衆的アプローチを参照しながら、尊厳ある縮退に伴走する者の役割を考えたい。「調査者」「研究者」としてではなく「メンバー／仲間」として現場に関わること。縮退する地域で今を暮らす人々と、生活の中での対話を大切にする。そして時と空間を共有する中で、新たな気づきを得て協働する。このような縮退する地域に伴走する作法とはいかなるものか。そのヒントを、かつて下手ものと言われた雑器を民衆的工芸品（民藝）として価値転換を説いた柳宗悦（1984）による民藝の趣旨からヒントが得られる。

まず民藝は「実用性」を備えていなければならぬ。用途を誠実に考えた健全なものでなければならず、それには質への吟味や、無理のない手法や、親切な仕事が要求されるという。自然なもの、素直なもの、丈夫なもの、安全なものが民藝の特色だという。小さな声との協働においては、小さな声の人にとって自然な、素直な、丈夫な、安全な活動や研究でなければならず、そのためには無理のない手法や親切な仕事が必要と言い換えることができる。まずは、安心できる場で、一人ひとりに向き合うことからはじめなければな

らない。

また、民藝は「無銘性」、「協力性」の美を備えているという。民藝は特別な作家の個性を表現するものではなく、無名の複数の職人の協力の仕事である。それ故に民藝品は個人の所産ではなく、多くの人の協力的所産だということに大きな意義があるという。尊厳ある縮退の現場も、無名の小さな声の人たちを中心とした住民と外部の専門家との協力の仕事であり、その成果はその協力的所産となり、現場の知とならなければならない。さらに、伝統という先人たちの技や知識の積み重ねによって守られている(先人の苦労と運動の積み重ねに立脚した)「伝統性」などを備えるという。

柳は民藝がなぜ必要なのかという問い合わせに対し「天才が作るわずかなものが美しいとも、それによってこの世は美しくはならない」からだと説く。同様に、ローカルな視点に根差したボトムアップ型の協働活動や研究がもっと行われなければ、社会は変わらないのであろう。

柳は40年にも及ぶ民藝運動を振り返った時、「民藝」という言葉を一つの形式化したものにしてはいけないと警鐘をならした。「民衆的作品だから美しい等と、初めから考えを先に立てて品物を見たわけではなく、ただじかに見て美しいと思ったものが、民衆的な性質を持つ実用品なのに気づいて、総称する名称がないので『民藝』といったまでである」と。そして「いつも今を見る」ことが大切であると説く。縮退する地域に伴走する者は、地域に暮らす人々と共にする時間が必要だ。そして、傍で「いつも今を見る」ことが求められているのである。実は、傍にいて「いつも今を見る」ことは、災害救援や復興の現場でボランタリーに関わる人々にも求められる姿勢(渥美 2014)に通じる。専門家としてその専門知を持ち出すのではなく、いつも目の前の今(被災者)を見つめ続ける姿勢のことである。筆者らは、そこにこれから尊厳ある縮退を実践していく姿勢を見ておきたい。

さらに、尊厳ある縮退というテーマは、対象がコミュニティに限定されない。現代社会はこれまでの成長拡大開発路線への反省を迫られている。いわゆる右肩下がりの社会に抗うことからさらなる抑圧や搾取を生み出すのではなく、いわば身の丈に合った生活を取り戻し、そこに生の充実を実現していくことは、分野を問わず喫緊の課題だと考えている。多様な分野において対話を実

現していくこと、その成果を公刊していくことが本研究を終えるに当たってのもう一つの展望である。

注

- 1 日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 実社会対応プログラム（研究テーマ公募型研究）人口減少社会における多様な文化の共生をめざすコミュニティの再構築 研究テーマ「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生」（代表 湿美公秀 平成30年度・令和3年度）。成果の一部は、湿美（2020）、石塚（2019; 2020）、石塚・湿美（2020）などにて既に公刊している。
- 2 尊厳ある縮退に取り組む地域間の交流、情報交換の場となるプラットホームとして、「尊厳ある縮退同好会」を含むホームページを開設している。<https://sites.google.com/view/shrinking-lab/>
- 3 財政問題は論拠としない。なぜなら、それは人々の居住を財政の関数だとみることにつながるからである。
- 4 尊厳概念については次項で詳述する。
- 5 例えば、文学においては、ノーベル文学賞作家カズオ・イシグロの小説「わたしを離さないで」は、映画にもテレビドラマにもなって、クローン、臓器移植、死といったテーマを伴って流布し、尊厳について考える機会となった。
- 6 西日本豪雨災害からの復興過程に参与し再生した復興支援酒『緒方洪庵』。この日本酒は、単にアルコール飲料として販売される商品ということではなく、そこに大学の専門知・総合知が織り込まれ、野村に関係する人々との間で共創知を生み出すツールになろうとしている。

参照文献

湿美公秀

2014 『災害ボランティア新しい社会へのグループ・ダイナミックス』 東京：弘文堂。

湿美公秀

2020 「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生—概念の整理と展望」『災害共生』4(1): 1-9。

安藤泰至

2019 『安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと』 東京：岩波書店。

安藤泰至

2020 「「死の自己決定」に潜む危うさ」『すばる』 4月号: 172-181。

イシグロ・カズオ

2006 『わたしを離さないで』 東京：早川書房。

一ノ瀬友博・東淳樹・原科幸織・林直樹・斎藤晋・前川英城・山下良平

2009 「集落限界点評価手法と持続可能な流域圏の構築」『平成20年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書』。

石塚裕子

2020 「地域内過疎地から考える「尊厳ある縮退」—兵庫県上郡町赤松地区を事例に」『災害と共生』4(1):33-48。

石塚裕子・渥美公秀

2020 「縮退時代のまちづくりに防災・減災を織り込む—兵庫県上郡町赤松地区におけるアクションリサーチ」『地区防災計画学会誌』 18:25-41。

石塚裕子・今井貴代子

2022 「小さな声—弱さが担うまちづくり」 堂目卓生・山崎吾郎編 『やっかいな問題はみんなで解く』 pp.215-236、京都：世界思想社。

川端亮

2023 「大学の地域とのかかわり—がいなんよ大学inのむらと復興支援酒「緒方洪庵」の取り組み」『未来共創』10:193-218。

吉川徹

2023 「地方における人口社会論の「生態系」」『未来共創』10:143-162。

植田今日子

2016 『存続の岐路に立つむら：ダム・災害・限界集落の先に』 京都：昭和堂。

NHK

2020 『映画 花のあとさき ムツばあさんの歩いた道』。

NHKスペシャル取材班

2017 『縮小ニッポンの衝撃』 東京：講談社。

大野晃

2005 「限界集落—その実態が問いかけるもの」『農業と経済』71(3):5。

岡田憲夫・平塚伸治・杉万俊夫・河原利和

2010 『地域からの挑戦—鳥取県・智頭町の「くに」おこし』 東京：岩波書店。

小田切徳美

2023 「「国土の多極集住論」の検討」『世界』 967:163-173。

柏木哲夫

2001 『ターミナルケアとホスピス(大阪大学新世紀セミナー)』 大阪：大阪大学出版会。

加藤泰史

2017 『尊厳概念のダイナミズム：哲学・応用倫理学論集』 東京：法政大学出版会。

金木健

2003 「消滅集落の分布について - 戦後日本における消滅集落発生過程に関する研究 その1」『日本建築学会計画系論文集』566:25-32。

金木健・桜井康宏

2006 「消滅集落の属性と消滅理由について - 戦後日本における消滅集落発生過程に関する研究 その2」『日本建築学会計画系論文集』71(602):65-72。

河合雅司

2017 『未来の年表：人口減少日本でこれから起きること』 東京：講談社現代新書。

カント、イマヌエル

2012 『道徳形而上学の基礎づけ』 中山元訳 東京：光文社。

木村由香・安藤孝敏

2015 「エンディングノート作成に見る高齢者の「死の準備行動」」『応用老年学』9(1):43-54。

木村由香・安藤孝敏

2018 「マス・メディアにおける終活のとらえ方とその変遷：テキストマイニングによる新聞記事の内容分析」『技術マネジメント研究』 17:1-19。

国土交通省・総務省

2016 「平成27年度過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査報告書」<https://www.mlit.go.jp/common/001145930.pdf> (2020/5/19 アクセス)

国土交通省

2015 「第二次国土形成計画」

<https://www.mlit.go.jp/common/001100233.pdf> (2020/5/19 アクセス)

小松美彦

1996 『死は共鳴する—脳死・臓器移植の深みへ』 東京：勁草書房。

小松美彦

2012 『生権力の歴史—脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐって』 東京：青土社。

小松美彦

2013 『生を肯定する—いのちの弁別にあらがうために』 東京：青土社。

佐久間庸和

2019 「グリーフケア・サポートの実践」島薗進・鎌田東二・佐久間庸和『グリーフケアの時代：「喪失の悲しみ」に寄り添う』pp.137-197、 東京：弘文堂。

尊厳ある縮退研究会

2021 <https://sites.google.com/view/shrinking-lab/> (2023/2/28 アクセス)

田中輝美

2021 『関係人口の社会学』 大阪：大阪大学出版会。

徳野貞雄・柏尾珠紀

2014 『T型集落点検とライフヒストリーでみえる 家族・集落・女性の底力：限界集落論を超えて』 東京：農山漁村文化協会。

地域経済総合研究所

2017 「「終活」に関する意識調査」

<https://chrome-extension://efaidnbmnnibpcajpcgclefindmkaj/> (2023/2/28 アクセス)

畠本裕介

2010 「限界集落論の批判的検討—地域振興から地域福祉へ」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』5：1-15。

林直樹・齋藤晋・江原朗

2010 『撤退の農村計画—過疎地域からはじまる戦略的再編』 東京：学芸出版社。

藤井多希子

2018 「人口・家族変動を踏まえた新たな地域構造の捉え方：人の「対流構造」と「活動人口」という視点」『都市計画』67(1)：46-49。

藤尾潔・土井勉・安東直紀・小山真紀

2014 「集落の消滅過程に関する考察 滋賀県多賀町保月集落の事例から」『日本都市計画学会関西支部研究 発表会講演概要集』12：125-128。

福留邦洋

2012 「災害発生による集落移転要因に関する研究」『日本都市計画学会 都市計画論文集』47(3)：913-918。

増田寛也

2014 『地方消滅：東京一極集中が招く人口急減』 東京：中央公論新社。

柳宗悦

1984 『民藝四十年』 東京：岩波書店。

山崎吾郎

2020 「消滅というリアリティに向き合う—非人間的な存在との関わりを捉えなおす」志水宏吉・河森正人・栗本英世・檜垣立哉・モハーチ ゲルゲイ編著 『共生学宣言』 pp.257-274、大阪：大阪大学出版会。

山下祐介

2012 『限界集落の真実：過疎の村は消えるか？』 東京：筑摩書房。

山下祐介

2014 『地方消滅の罠：「増田レポート」と人口減少社会の正体』 東京：筑摩書房。

矢守克也

2020 「シュリンク・シュランク・シュリンクング—縮小の「前」と「後」」 『災害と共生』
4(1)：11-20。

ローゼン，マイケル

2021 『尊厳』 内尾太一・峯陽一訳 東京：岩波書店。

渡辺一史

2003 『こんな夜更けにバナナかよ』 北海道：北海道新聞社。

Theoretical Preparation and Prospects for Shrinking Strategy with Dignity

Tomohide ATSUMI, Yuko ISHIZUKA

Abstract

This paper described the theoretical preparation and practical prospects for shrinking with dignity, based on the findings of our research project "Shrinking Strategy with Dignity for Rehabilitation and Revitalization of Community". First, the paper outlined the debate surrounding the shrinking population and the case studies of community rehabilitation and revitalization as background for dignified shrinkage, and then introduced the basic concepts of shrinkage and dignity for research and practice of shrinking with dignity. Next, as issues to be considered for promoting dignified shrinkage research and practice, the expansion of the target area, regional diagnosis, the process and time of the disappearance of communities, models on which dignified shrinkage relies, and the development of tools in the field of practice were discussed and theoretically prepared. Finally, the paper looked at the challenges of action research to accompany shrinking with dignity, and confirms the necessity of a folk approach inspired by Mingei movement.

Keywords : shrinking with dignity, depopulating society, dignity, shrinkage, action research, folk approach